

おもてなしを極める生き方 げいぎ 「芸妓」

芸妓衆は、宴席において舞踊や演奏などの芸能を披露し、客人をもてなす女性たちのことです。「芸者」とも呼ばれます。江戸時代の遊郭では男性が、花魁(遊女)を迎えるため、帮間(太鼓持ち)や芸妓衆を呼び宴を催すのが習わしでしたが、花魁と芸妓の役割は明確に分かれており、「色を売る遊女」と「芸を売る芸妓」はまったく別の職種として区別されていました。「芸は売っても身は売らぬ」「左袂を取る」という言葉があるように、芸妓衆が自分たちの職業に誇りを持っていたことが分かります。



半玉(はんぎよく)

一人前の芸妓と認められる前の、修行期間の女性たちのこと。お稽古や実践的修業を積みながら、芸妓をめざします。昔は、芸妓衆の半分の金額でお座敷に呼ぶことができたことが由来となるそうです。※地域によって「舞妓」「雛妓」「お酌」とも呼ばれます。

地方(じかた)

三味線の演奏や唄を担当する芸妓衆のこと。唄をうたい、立方の舞踊を引き立てます。地方は、かなりの年季と才能、技術が必要とするので、一朝一夕にはなれません。

立方(たちかた)

舞踊を担当する芸妓衆のこと。花街それぞれに決まった流派の日本舞踊をお師匠さんから仕込まれます。立方ひとりが持つ舞踊のレパートリーは、定番からその人独自の演目まで、数十曲にも及びます。

あなたの知らない世界

花柳界

花柳界は、遊びの場を提供する「料亭」、料理を提供する「割烹料亭」、芸妓衆の屋形である「置屋」の、三つの業種「三業」から成り立っています。芸妓衆の芸や座敷を占有する秘匿性、そして、料理とお酒を楽しめる非日常の世界です。

「花街」とは

芸妓が活動の場とする場所を「花街」と言います。読み方は各地域によって異なりますが、「はなまち」や「かがい」と読まれます。その呼び名は、花の紅や柳の緑の美しさに似た艶やかな女性のいる街をあらわす「花街柳巷」という漢語に由来すると言われています。

芸妓の存在を核として多くの業種が集まる商業圏でもあり、都市に流入する人々の衣食住を満たすために職人たちが集まり、娯楽が生まれ、その土地ならではの気風や美意識、芸能が各地域で形成されてきています。

料亭



和食、特に会席料理を提供し、芸妓衆を呼んでのお座敷が許可されている飲食店。お座敷とは、芸妓が呼ばれる宴の席のことを言います。

置屋



芸妓衆に教育を施す業種。女将は所属する芸妓や半玉たちと寝食を共にしながら、生活全般の教育をします。名称は、芸妓が「箱(看板)を置く」家であることに由来します。

見番



料亭・置屋間の業務連絡や、芸妓の派遣を担う事務所。芸妓の売上を一括管理し、広報など花街の窓口業務も担います。料亭・置屋・芸妓によって組織された組合の事務所でもあります。

全国における花街文化

かつて日本には500ヶ所を超える花街が存在していたと言います。現在では、京都を始め、岩手・山形・新潟・石川・愛知・大阪・奈良・香川・徳島・愛媛・高知・福岡・長崎・東京に花街が存続しています。東京では、現在23区内にある花街(霞町・新橋・赤坂・神楽坂・浅草・向島)を「東京六花街」と呼び、それぞれの特徴や文化を引き継ぎ、後世へと繋いでいます。



▲東京六花街合同の舞台の様子



粹人墨客に愛される桃源郷 向島花街

昔から浮世絵にも描かれ、数多くの小説や芝居の舞台となってきた向島。その向島2丁目及び5丁目にひっそりと佇む向島花街。浅草から隅田川を渡った向こう側に、今も伝統が残る江戸の桃源郷が隠されています。

日常からの非日常へ 隠れ里であった向島

向島の「むこう」は、浅草から見て向こう側にあたる「隅田、寺島、牛島」などを指して向こうの島と呼んだことによるとされています。江戸時代、向島一帯は桜の名所や神社仏閣が点在し、また少し足を延ばせば田園風景が広がる風光明媚な地として知られていました。また当時、川岸には料理屋や茶屋があり、江戸での贅沢に飽きた旦那たちが吉原や柳橋の芸妓衆を連れて、向島の店を訪れたと言います。当時、江戸の人々にとって、舟で渡る向島は日常から離れた特別な場所・隠れ里となっていました。

昔は「葉ざくら芸妓」と言われていた向島芸妓。花街の誕生については、諸説あるため定かではありませんが、昭和15年には、料亭・料理屋215軒、芸妓屋(置屋)408軒、芸妓衆1300名という一大花街となり、その数においては、全国1位だったそうです。隠れた場所であった向島には、政財界、文化人、力士など、著名なお客様が多くいらっやっていました。現在でも、料亭10軒、置屋45軒、芸妓衆80名と、東京では芸妓衆の数が多い花街です。

向島の『かもめ』制度

向島花街独自の、半玉になる前の見習いのような制度である「かもめ」。「かもめ」という名前は、昭和8年創業の向島の老舗料亭「櫻茶や」の先々代女将の雨宮スミ子さんが、隅田川の都鳥にちなんで名付けたそうです。現在、かもめの中から、本格的に芸の修行をして一人前の芸妓をめざす人も出てきました。向島花街にはなくてはならない制度です。

「知らない世界を見てみたい」という思いから、かもめに応募しました。かもめとしてお座敷に入った時、お姐さんたち(芸妓衆)の踊りを見て綺麗だなと思い、その後、芸妓になるためにお稽古を始めました。かもめは本物の芸妓衆を見ることができる、とても良い機会だと思います。



かもめから芸妓になったちえ美さん

花柳界をまとめる見番「向島墨堤組合」

向島墨堤組合は、高級な料理店と待合処を兼ねた「料亭」と、芸妓を料亭へ派遣し、後継者育成などを行う「置屋」が合併して出来ました。他花街では「見番」とも言います。花街全般の総合的な情報管理や、伝統文化邦楽全般、舞踊、三味線、笛、太鼓、鼓、唄、作法などの指導・育成にも力を注いでいます。組合内には芸妓衆のお稽古の練習場が完備されており、組合前を通ると時折、芸妓衆がお稽古をする、お囃子や唄が聞こえてきます。



芸妓衆に会えるイベント



- 一月** 年始まわり
- 二月** 節分
- 三月** 墨堤 さくらまつり
- 七月** 隅田川 花火大会
- 九月** 牛嶋神社 例大祭
- 十月** すみだまつり
- 十二月** 向島をどり

正月には芸妓衆は出の衣装(正装)で、各料亭へ年始の挨拶へ向かいます。お座敷では、芸妓衆が獅子舞を踊り、お客様と新年を祝います。

「お化け」と言われる独特の行事があります。芸妓衆は仮装をしてお座敷に出向きます。通常では見られない芸妓衆たちの姿を見ることが出来ます。

隅田公園にて開催される祭にて、芸妓衆が期間限定で、「芸妓茶屋」を催します。芸妓衆がお茶を振るまう貴重なイベントです。

花火大会の日には、花街の料亭が屋上などを開放し、宴席を行なっています。いつもは着物の姿の芸妓衆ですが、この日は浴衣で登場します。

5年に一度の大祭では、芸妓衆が手古舞を奉納します。夜に行われる町内渡御では、芸妓衆の担ぎ姿も見ることが出来ます。

錦糸公園を中心とした祭では、芸妓衆が舞を披露しています。毎年多くの方でにぎわう祭です。

芸妓衆の日頃のお稽古の成果を披露する舞台として開催されています。お座敷でしか見ることができない踊りやお囃子を見ることが出来ます。※不定期開催



お座敷遊び

宴会にて、場を盛り上げるため芸妓衆と一緒にするゲームのことです。
お座敷にあるものを使ってゲームをするのも特徴で、
誰もができる簡単なゲーム内容になっています。
代表的な3つの遊びをご紹介します。



金毘羅船々

芸妓とお客様が向かい合わせに座り、2人の間に台を置き、台の上に腕を置きます。「金毘羅船々」の歌にあわせて、2人の間の腕の上に、交互に手を出しては引っ込みます。相手が腕を取ったら、ゲー。そのままの時は、パー。テンポを速めて、間違った人が負けとなります。



とらとら

芸妓とお客様の間に、屏風などをお互いの姿が見えなくなるように置きます。「とらとら」の唄にあわせて踊り、唄の最後で、虎と和藤内(加藤清正)と老婆(清正の母)のいずれかのジェスチャーをして勝負。虎は和藤内に負け、和藤内は老婆に負け、老婆は虎に負けです。



おまわりさん

芸妓とお客様の間に、太鼓を置きます。太鼓の両側に立った2人が「おまわりさんよいやさ」の歌にあわせて、じゃんけんをします。勝った方は太鼓を2回叩き、負けの方はその場で1回転するのがルール。どんどん歌のスピードを上げて、間違った人が負けです。



お座敷をつける

宴席に入っている芸妓がお座敷で季節の踊りや小唄振りなどを披露すること。
「お座つき」とも言います。

遠出

芸妓が所属している花街以外(東京都外含む)、お座敷や船遊び・行楽地への同行などを行うこと。

花代(玉代)

芸妓を呼んで宴席を設ける場合の代金のこと。花代とは別に芸妓の伎芸に対しては「祝儀をお渡しします。」

一本

一人前の大人だと認められた芸妓のこと。「半玉」からの卒業を意味します。

出先

その日芸妓衆が呼ばれている先の料亭のこと。芸妓衆は「今日のお出先さん」と言います。

馴染み

お座敷に3回以上来てくださったお客様を「馴染み」と言います。2回目のお客様は「裏を返す」と言います。

特別な花街ことば

花柳界には数多くの独特なことばが残っています。地域によっても少しずつ異なり、各地域ごとに独特な世界をつくり出しています。花街で粹に遊ぶために知っておきたい最低限のことばをご紹介します。

向島芸妓衆の歌

かもめ小唄

昭和20年代後半に、向島2丁目に住まいを構えていた向島花街見番の萩江節・長唄の師匠 萩江露光さんが向島花街のためにつくった曲だそうです。向島花街のテーマソングと言える曲です。

春

富士は 藍色紫や
つくばは銀に流るる すみだ川
土手の櫻は 一度に笑う
かもめが仲良い向島

夏

今も昔も 変わらぬものは
姿やさしき 都どり
舟の青すを もるるは小唄
情と意気地の向島

秋

月に風情を 言問あたり
待乳 今戸に 灯がともる
思ひ 白鬚 秋の夜長い
つきせぬ 眺めの 向島

冬

雪の水神 今宵は つもる
恋は だんだん深くなる
想いこがるる 綾瀬のあしを
乱れて 飛びたつ 冬の雁

芸妓衆に聞いてみました



聞きたいことはたくさんあるけれど、誰に聞いたらいいのか分からないことはありませんか？
芸妓衆や見番にて今までお客様からよく質問されたものをまとめました。こちらを参考にお座敷の準備をしてみましょう。

Q

予約はどうやってすればいいのでしょうか？

A 予約は、各料亭にお電話でご予約頂けます。ひとりあたりの予算が決まっていれば、その金額でお店がアドバイスをしてくれますよ。向島墨堤組合では、システム等のご説明も承っております。お気軽にお問い合わせください。



Q

「ご祝儀」って何ですか？

A ご祝儀とは、海外で言うチップのようなものです。お客様が芸妓衆に気持ちを表すものとして渡す心付けです。芸妓衆に直接手渡ししたり、女将にまとめて渡すこともできます。



Q

芸妓さんはお座敷ではどのような服装ですか？

A 基本は洋髪に和服ですが、お正月の正装や花火大会の浴衣など、時季やイベントに応じて特別な衣装となりますので、ご予約時にご相談ください。



Q

芸妓さんと何を話したらいいんでしょうか？緊張してしまってもううまく話せません。

A 何でもお話しください。何でも話したらいいんですか？普段はどんなことをしているのか？そういった気軽な質問でも、お仕事のお話でも何でも大丈夫です。一緒に楽しくお喋りしましょう。



Q

料金が気になるのですが、金額はどのくらいかかるのでしょうか？

A 料理内容や人数により異なりますが、目安額は飲食代・花代(玉代)含めておひとり5万円～(税・サービス料別)です。詳細は各料亭へお問い合わせください。



お座敷のいろは



お座敷と言っても何をどうしたら良いのか分からないことも多く、初心者の方にとってはハードルが高いと感じられるかもしれません。しかし、向島花街は多くの料亭で、初めてでも芸妓衆とお座敷を楽しむことができます。

基本的に、お座敷は以下の順番で進行します。どのような流れなのかが分ると実際のお座敷も緊張感なく楽しめます。お座敷に出向く前にぜひご一読ください。

② 芸妓衆との歓談

会席料理を頂きながら、芸妓衆とお酒を楽しみます。芸妓衆がお酌をしてくれるので、芸妓衆にも「どうぞ」と、勧めましょう。芸妓衆は宴席の場では食事はしません。



④ お座敷遊び

芸妓衆たちと一緒に座敷遊びを楽しみましょう。遊び方が分からなくても、芸妓衆が遊び方を教えてくれます。



① スタート

参加する方が全員揃ったスタートとなります。芸妓衆がお座敷に居られる時間は決まっています。遅れてしまうと、その分芸妓衆と楽しく過ごせる時間が減ってしまうため、要注意です。



③ お座敷踊り

踊りが始まったら、談笑やお食事は一時中断です。時季やお客様にあわせて行われる芸妓衆の唄や踊りを楽しみましょう。



⑤ お開き

一旦は終わりますが、もし時間が足りなければ芸妓衆を協力店へお誘いしましょう。次のお座敷が入っている場合もありますが、なければ時間を延長することもできます。



いろは



向島花街を形成する人々

様々な人々で成り立っている向島花街。芸妓衆はもちろんのこと、花街を守り、次世代にも繋いでいこうと働く方々にお話を聞いてみました。

インタビューから、向島花街を大切にする方々の熱い想いが見えてきました。



こすず 半玉 小鈴さん

幼い頃から日本舞踊を習っていたことがきっかけで、芸妓をめざすようになりました。向島には同年代の芸妓さんたちが多いと聞いて、向島に出てきました。今は早くお姐さんたちになれるよう、日々お稽古を頑張っています。



京小間物 まねき屋 東海枝 享子さん

京都の雑貨を扱っているお店です。向島の芸妓衆はもちろん、全国の芸妓衆も購入しに来てくれます。お店オリジナルの商品も多いので、オーダーメイドも受けています。今後は芸妓衆に特化したお店作りを続けて行きたいと考えています。



サロンド ケイ 緒形 秀子さん

花街がある街とは知らず、向島でこのお店をオープンしました。お店には芸妓衆や料亭のおかみさんが髪の毛のセットをしに来てくれます。これからも向島で娘と一緒にお店を続けていきたいと思っています。



はつわけきく 置屋 初分菊よし お母さん ひろさん

先代のお母さんから引き継いで、「置屋のお母さん」になりました。向島花街を繋いでいくために若い芸妓衆を育てていきたいと強く思っています。向島の芸妓衆はガッツがあるのが特徴だと思います。若い人が芸妓に興味を持ってくれたら嬉しいです。



長命寺桜もち 山本や 社長 山本 幸生さん

芸妓衆や料亭さん、花街に来られるお客様が手土産として購入してくださるので、昔から花街とは繋がりががあります。11代続くこの店も向島花街も、この地で生まれたものなので、続いてきた文化を途絶えさせないように守っていきたくと思っています。



料亭 櫻茶ヤ 総料理長 添野 光二さん

料理はいかにお客様の要望に応えられるか、そこが重要だと感じております。でもここは花街ですから、芸妓衆との会話を楽しんでいただきながら、その次にお料理が美味しかったなと思ってもらえれば、それが一番嬉しいですね。



芸妓 万てんさん

学生時代、ホームステイでの経験がきっかけとなり、日本人の女性にはできないこの芸妓という職業を選択しました。向島は間口が広く、かめ制度もあり、入りやすく続けやすい環境が整っているのではないかと思います。私はもちろん、一生芸妓で生きていきたいですね。

